# 紹　介

## ◉古代研究民俗學編第二　折口　信夫著

昨秋公にされた古代研究民俗學國文學兩編と併せて一部三冊、過去に於ける著者の全勞作の總結集である。著者折口氏の學問は他に何人も比照するものなき獨自の風格を有する、そは唯就いて見るべく一編の紹介のよく盡すを得ざる所である。例へば本冊の中「神道に現はれた民族論理」、「大嘗祭の本義」「古代人の思考の基礎」等の諸編は幾分その全豹を窺はしめるかの如くであるが、それらはいづれも著者自身に於いてすでに一の「假說」であるといふ。蓋し、著者は、概念の上に概念を、論理の上に論理を積重ねて以て巨大なる知識體系の構成を試みようとするのではなく、寧ろ概念を概念以前のものに還へし論理をそれが發生の地盤にまで引戻さうとする。あくまで資料の實感の上に立ち幾種の事物の多面的な比較に於いてその間の關係を正しく通觀しようとする。その際著者は餘りに多くを自己の主觀に頼み、一つの事物の上にあまりに複雜なる意味を認めようとするが故にその所論の理路を辿るには時に稍々困難を感じないではないが、かの一部唯物史觀論者の如く唯一つの抽象的な論理によつて一切の事象を處理しつくすが如きことは、この著者の最も好まない所であらう。讀者はかくの如き著書に對しては特にその意を汲むに十分に親切且つ細心でなければならない。卷末に附せられた「追ひ書き」の一編はその爲にもまづ讀まるべきものであらう。それは著者の學的生涯のつゝましやかな回顧の中に自ら自己の立場の主張をも含めた近時稀に見る名文である。（菊判、著作年表總索引共七三〇頁、定價六、五〇）〔柴田〕

## ◉御成敗式目研究　植木直一郎著

御成敗式目一篇に關する著者多年の努力の收獲である。從來學界には一般法制史、武家法制史は決して尠くこしない。然したゞ一篇の式目を中心とする斯樣の徹底的研究の成果を有たなかつた。著者の研究心は式目を諸